

<前回：宗教哲学と現代1、科学技術・生命・心>

- ・現代の科学技術の到達点。生命から心まで科学の対象、技術の力が及ぶ範囲となった。
- ・心：最後の領域。宗教の直接の場。

「脳認知系の研究はすでに宗教を対象にしてなされてきた実証的研究と齟齬するものではないが、宗教についての新しい研究方法の可能性を提示する結果になっている。宗教研究者が独自の領域として設定してきた分野は、どういう意味において独自であったのか。それは他の領域の研究と比べてどのような特別な視点を必要とするかを、新しい視点のもとに考え直すことが求められよう。」(井上順考「宗教研究は脳科学・認知科学の展開にどう向きあうか」、宗教哲学学会『宗教哲学研究』No.35. 2018、昭和堂)

1. 「心を科学する時代」(「心」が科学的探究の対象となった時代)

心を科学する営みは、現代において急に始まった動きではなく、それは19世紀に遡る実証的な心理学、あるいは深層心理学・精神分析学において開始されていた。この19世紀の流れから、宗教心理学や牧会心理学・牧会カウンセリングなど、キリスト教との接点が構築されてきた。

2. 19世紀からの「心の科学」の前史／現代の実験心理学、認知科学、脳科学との接点として、病と医療の問題。うつや統合失調症とも関わる虐待の問題／「脳科学と心」に隣接する分野として、霊長類研究とAI(人工知能)・ロボット研究という対照的な二つの領域／現代のキリスト教研究との関わり。

(1) 心を科学する時代へ

3. ちょうど自然科学に加わろうとしていた心理学(19世紀後半から20世紀)も宗教をその研究対象としつつあった(島菌進／西平直編『宗教心理の探究』東京大学出版会)。

- ・心理学の知見は20世紀後半には積極的な意味が自覚。牧会心理学や牧会カウンセリングの登場。
- ・ティリッヒ：アメリカ亡命に先立つフランクフルト大学時代に、フランクフルト学派の思想家の影響で精神分析学に関心をもつ。

アメリカでのユングやフロム、そしてカレン・ホーナイン、ロロ・メイらとの交流を通して、牧会心理学、牧会カウンセリングに関する神学的論考として結実するのは、1950年代であった(『宗教と心理学の対話——人間精神および健康の神学的意味』教文館)。

↓

パネンベルク(たとえば、『人間学——神学的考察』教文館)も現代心理学の動向に強い関心。しかし、この時期までのキリスト教神学において視野に入れられたのは、主に精神分析学や発達心理学の理論であり、「心を科学する時代」に直接結びつくものではない。

(2) 心の病をめぐって

4. 脳科学の関連領域、中心には、病・医療の問題が位置。

社会脳研究：アレキシサイミア(失感情症)や自閉症スペクトラム。

前者が自分自身の情動・感情状態への「気づき」「言語化」における障害であるのに対して、後者は社会的な対人交流・コミュニケーションにおける障害という点で対照的であるが——前者は「自分のことがわかること」に関わる病であり、後者は「他人のことがわかること」に関係した病である——、人の心を理解するという点をめぐる障害という特性を両者は共有している。

8. 「不適切な養育」(マルトリートメント)による子どもの脳の損傷がうつや統合失調症などの病を引き起こすという指摘。

10. 子どもの虐待。キリスト教とも無関係ではない。・・・脳科学の問題は、心や身体の病を通して、キリスト教の実践的営み、そして実践神学の問題領域と結びついているのである。

(3) 霊長類研究から人間へ

11. 認知科学の研究に隣接、霊長類研究。

近代以前の間人学が人間と神との比較（関係と差異）を主題としてきたのに対して、近代以降の間人学の特徴は人間を動物との対比によって論じる点に認められる。

12. 芸術。「チンパンジーがなぜ表象を描かないのか、という問いから、ヒトはなぜ描くのか、のヒントを探ることにした」として開始された「芸術認知科学」（齋藤巫矢『ヒトはなぜ絵を描くのか——芸術認知科学への招待』岩波書店）が、「チンパンジーたちも言語を習得することで、世界が少しカテゴリー化され、ある程度の記号的な見方をしているのかもしれない」と言われるようなヒトとの類似性を発見するとともに、「チンパンジーは、今ここに『ない』ものを見るよりも、今ここに『ある』ものをしっかり見ている。だからチンパンジーは、将来を考えて絶望しない」ことを指摘している。

では、宗教に関してはどうだろうか。

宗教に関わる霊長類との比較研究は、芸術以上にハードルが高いが、そのハードルも超えられないものではないように思われる。

12. 山極壽一『ゴリラからの警告——「人間社会、ここがおかしい」』毎日新聞出版。

13. 言葉・文字という技術（ベルナール・スティグレール）

(4) AIあるいはロボットは何をもたらすか

14. AI（人工知能）やロボットをめぐる研究領域。ビッグデータ、AI、ディープラーニング（深層学習）。

・西垣はシンギュラリティ説には批判的。ニック・ボストロム『スーパーインテリジェンス——超絶AIと人類の命運』日本経済新聞出版社、マレー・シャナハン『シンギュラリティ——人工知能から超知能へ』NTT出版。

15. 西垣によれば、深層学習が人々にアピールしたのは、それが統計処理にもとづくパターン認識の精度を向上させたからだけでなく、脳の働きにかなり近づいているとの印象を与えたから——深層学習におけるニューラルネット（神経細胞網）と呼ばれるモデルの使用——。

・サイバネティクスの不死（脳エミュレーションによって身体の死の後にも人格をコンピュータ上で存続させる。このSF的な話が神学の周辺に迫りつつあることについては、T・ピーターズほか編『死者の復活——神学的・科学的論考集』（日本キリスト教団出版局）。

16. 西垣：生物と機械とのあいだの境界線は、深層学習などによって架橋できるようなものではないことを指摘。コンピュータは、プログラム（過去）に依存して作動する機械であり、ビッグデータ時代になってもこの基本は変わらない。この意味で、機械は他律システムであり、それに対して、生命や心は、自律システムであることを特徴としている——人間の主体的自由や倫理的自律性はこれに依拠する——。ロボットが感情、心、人格をもつことができるかという問題は、少なくとも当面は否定的に答えることができる。

・そもそもロボットには自律システムとなるのに不可欠な「身体」が厳密には存在しない、つまり他律的に作動する開放系であるからと言い換えてもよい。確かに、人間も身体を介して環境との間で情報やエネルギーの交換を行うという点では開放系であるが、それは、身体や心が閉鎖系であることに基づく開放性であって、そこにロボットとの根本的な相違がある。

・AIやロボットとの人間の比較が人間の固有性の理解を深める上で有益。

人間の知能とは何か？　そもそも知能検査は何を測定しているのか？

(5) 心を科学する時代におけるキリスト教研究

17. 脳科学・心とキリスト教思想、啓示論。A・E・マクグラス『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』。

12. 宗教哲学と現代 2 —解放系

「最近の四半世紀あまりの、エキュメニカル神学のひとつの大きな傾向は、さまざまな『差別』からの解放問題が登場し、それが熱心に論じられてきたことだと言ってよいだろう。現代世界にはいろいろ差別の形式がある。・・・そうした政治経済的、人種的、文化的等々のさまざまな理由で、これまで『歴史の下』(the underside of history) に抑圧されてきた諸集団が、現代神学の領域でも抗議の声を上げ始めた。そしてそれがさまざまな成果をもたらし始めている。」(栗林輝夫『荊冠の神学——被差別部落解放とキリスト教』新教出版社、1991年、4頁)

(1) 現代神学を規定する二つの問題系

「現代キリスト教思想は多岐にわたっており一見混沌とした様相を呈しているものの、この動向(特に1980年代以降)を詳細に分析するとき、次の二つの中心問題を確認することができる。

1. キリスト教と科学技術(自然科学が担う近代的合理性と技術的革新)との関わり
2. 多元的社会におけるキリスト教の課題・意義(公正・正義に対するキリスト教の寄与)

・・・

現代の科学技術の問題が社会的正義の問いと無関係であり得ないことは、環境と経済が分離不可能な問題群を構成していることから、明らかである」。

(2) 解放の神学の概要

1. 「解放の神学」系という問題群の核をなす「解放の神学」の概観。

・発端：ラテンアメリカにおいて「解放の神学」という名称をもって登場した実践的神学運動。第二ヴァチカン公会議(1962～65年)とも連動した神学動向——グティエレス『解放の神学』岩波書店)、ソブリノ、ボフラが名前を連ねる——。

少なくとも、1950年代後半のラテンアメリカ司教会議(リオデジャネイロ、1955年)やキリスト教基礎的共同体運動(1957年頃から)に遡る。問題は、政治的経済的な抑圧、格差、貧困であった。当時のラテンアメリカを規定していたのは、軍事独裁と大土地所有を特徴とする強権的な政治経済体制であり、その背後にはアメリカ合衆国を中心とする列強の意向が存在した。

・金子啓一が『岩波キリスト教辞典』の「解放の神学」の項目。こうした歴史的状況の中で「被抑圧状況におかれてきた民衆の解放を求める運動が高まり、その運動にキリスト者も参与」という仕方で生まれた神学潮流が、解放の神学だったのである。もちろん、キリスト教には、「被抑圧状況におかれてきた民衆の解放を求める運動」に共鳴しそれを推進する動きが最初期から存在していた(イエスの宗教運動やパウロのエクレスシア創設)。

・1960年代に始まったラテンアメリカの解放の神学は、その後、1980年代にかけて、抑圧からの解放を希求するさまざまな問題領域へと世界各地で急速に広がって行く。

(3) 「解放の神学」系とは何か

2. 金子啓一は、「解放の神学」の辞書項目の中で、韓国の民衆神学、黒人神学、フェミニスト神学を合わせて扱っている。

・解放の神学の諸潮流は、特に1990年代になると停滞期に突入。停滞の原因はさまざまであるが——民衆神学の場合は、軍事独裁から民主国家への移行によっていわば目標を見失ったことがしばしばその原因に挙げられる——、先進国を中心とした政治の保守化、ソビエト連邦崩壊に象徴される共産主義の明確な後退、経済における新自由主義の台頭など。社会や文化の変革による「解放」をめざした運動体の活力を奪い、解放の神学の諸潮流に

停滞をもたらした。

・この状況が再度転換するのは、21世紀に入ってから、2010年頃のこと。

< 2017年度・前期 >

1. 「解放の神学」系とは何か
2. 拡張された自然神学と社会科学
3. 解放の神学と宗教的社会主義
4. フェミニスト神学
5. 黒人神学
6. アジアの解放の神学
7. アフリカ神学の動向
8. 政治神学の現在
9. 宗教的寛容論
10. 民主主義とキリスト教
11. 戦争論と平和論
12. 経済の神学
13. 経済と環境
14. 経済と政治

3. 20世紀後半の解放の神学の前史として19世紀のキリスト教社会主義あるいは20世紀前半にかけての宗教社会主義を位置づけることができる。解放の神学は突然始まったものではない。

・19世紀以降の西欧の近代社会において、キリスト教的救いのメッセージはしだいに個人主義化し、個人の内面の事柄に集中する傾向を示すようになる。この動向は、本来の「救済／解放」(Salvation/Liberation)が内面の「救済」と社会的な「解放」へと分極化することとなって現れる。

・1960年代以降、特に目立つようになったさまざまな属格の神学——希望の神学、平和の神学、人権の神学、日本の神学・・・——を連想する人もいると思われるが、その理解はやや一面的。解放の神学は、人間の「解放＝救済」の問いというキリスト教神学の本来の事柄に関わる問題提起なのであって、決して、時流に乗った流行神学ではない。

・「解放＝救済」への問いによって結ばれた、黒人神学、フェミニスト神学、民衆神学などをも包括した広範な神学動向を、「解放の神学」系と表現する。「解放の神学」系は現代神学の主要な潮流の一つ。

4. 現代の「解放の神学」系と、キリスト教史の中にさまざまな形態で確認できる「解放」の神学との違い。

5. 抑圧構造を批判的に解明する手段として社会科学的分析。

人間の解放がそこで問題となる現実世界は、伝統的に罪と規定されてきたが、近代以降、それは抑圧構造(エーリッヒ・フロムやティリッヒらに倣うならば、「破壊の構造」としてその複雑化の度合いを著しく高めている。

・解放の神学におけるマルクス主義問題となって問われたこと。この問題は、「解放の神学はキリスト教的見せかけをもったマルクス主義に過ぎない」という広範に広がった思い込みとなって現れている(Christopher Rowland(ed.), *The Cambridge Companion to Liberation Theology*, Second Edition, Cambridge University Press, 2007, p.xiii)。

・「解放の神学」系にとって社会科学的分析は必要不可欠であり、マルクス主義がそのために用いられることがあった。しかし、それとイデオロギーとしてのマルクス主義の受容とはまったくの別の事柄。

6. グティエレッツは、『解放の神学』(岩波書店)において、神学の役割を「神のことは

に照らされた、キリスト教的実践に対する批判的考察」とし、発展主義（開発主義）から社会革命（解放）への転換を主張しているが、その中で、マルクス主義について次のように言及している。

「現代神学が、自らの思想の源泉を探って、この世の変革と歴史の中での人間行動の意義を考えはじめたことについては、マルクス主義に負うところが大きいのである。さらに、神学は、その独自の考察によって世界の変革に意義を与え、それを把握すると同時に、信仰理解の試みによって歴史における人間の歴史的実践の意義を汲みとり、それを把握する。このとき、マルクス主義との対峙が役に立つのである。」

(4) 解放の神学の挑戦は続く、そして日本

6. 1990年代を中心に停滞期。『解放の神学の再興』（2013年）の編集者チア・クーパーは、この論集の序論において、次のように述べている。

「1997年に解放の神学を研究しようと決意したとき、アメリカ合衆国におけるわたしの知人たちの圧倒的な反応は、『なぜそれを研究したいのか？ 解放の神学は終わっている』というものであった。」

7. ベルリンの壁の崩壊に象徴される共産主義の退潮と民主主義的資本主義（特に新自由主義）の勝利、そして何よりもキリスト教界の保守化が、解放の神学に冬の時代をもたらした。

・しかし、クーパーが指摘するように、「ベルリンの壁の崩壊によって抑圧がなくなったわけではない。解放運動家はなお抑圧と戦っている」。そして、「解放の神学は、ゆっくりにあるが、アメリカとヨーロッパの学問世界に戻りつつあるのだ」。

・「解放の神学」系はより強力な多様な隊列を組み直して再登場しつつあるのである。

8. 問題は日本である。

「日本のキリスト教は、第一世界による第三世界の搾取の恒常化ではなく、グローバルなコンテキストの中で共同体として共生するにはどうしたらいいのか、そのことを倫理的にも実践的にも究める解放的な課題を負っている。ポストコロニアルな視点からすれば、ポストモダニズムの問題は、その公開性や局所性の高揚をいかにして現代世界の道徳的な正義の課題にも応えられるように組み替えられるか、ということである。ポストコロニアルの批判に耳を傾け、アジアの植民地主義下の民衆と連帯することこそ、日本のポストモダニズムの方向をいっそう豊かなものにし、特権的第一世界の仲間内の消費をめぐる贅沢な議論に留まらない、解放に向けた一歩を実践的に押し出す契機になるのではないだろうか。」（栗林輝夫『栗林輝夫セレクション2 アメリカ現代神学の航海図』新教出版社、2018年、222-223頁）

9. 日本における「解放の神学」の可能性。

・日本における「解放の神学」についても、これまでそれなりの議論の蓄積が存在する。

ルーベン・アビトと山田経三（グティエレッツ『解放の神学』岩波書店、の共訳者である）との共著『解放の神学と日本——宗教と政治の交差点から』（明石書房、1985年）において、『解放の神学』、『民衆の神学』のような動きに触発されて、日本の（プロテスタント・カトリックを含む）キリスト教共同体が、20世紀末の世界の中の日本というこの具体的な歴史的状況において、今後いかなる役割を果たすか」という問いが立てられている。

・栗林輝夫『荊冠の神学——被差別部落解放とキリスト教』。

先駆者として田中正造や賀川豊彦を挙げる（栗林輝夫「原発と田中正造の環境/技術の神学——人間は自然の「奉公人」」、『関西学院大学キリスト教と文化研究』2015年）。

・豊かな先進国と総中流意識を満喫していた1990年代の日本において「解放の神学」はまさに冬の時代の只中にあり、この状況は現在も大きく変化したとは言えない。しかし、多元性と絡み合った軋轢と進展しつつある格差とは日本の現状が「解放の神学」系と決し

て無関係ではないことを示している。

10. ラテンアメリカの解放の神学のいわば母体・実践の場となった「基礎共同体」(Basic community)を参照。

・スリランカ出身でアジアの解放の神学を提唱するアロイシウス・ピエリス。「基礎共同体」に繰り返し言及(Aloysius Pieris, *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988)。

ピエリスは、アジアの解放の神学の担い手となるべき「地域教会」(the local church in Asia)が「基礎共同体」の中で育まれると述べている。

11. 「基礎共同体」の教育的機能。

1960年代のラテンアメリカの解放の神学は、それと連携して進展していた「解放の教育学」と密接な関わりにあった。パウロ・フレイレ。

・識字教育とそれを通じた「意識化」——被抑圧者＝民衆が対話的な仕方で言葉の意味を学んでゆき、それによって現実的状况を批判的に認識することが可能になる、そしてそれは現実の変革へ展開する——は、「基礎共同体」が何よりも教育的機能を果たす場であることを示唆している。

・日本における基礎共同体の可能性。地域に根ざした学校の存在。

現在の学校は教師があまりにも多忙であり、PTA問題が示唆するように、学校と家庭と地域は連携機能を失いつつあると言うべきかもしれない。しかし、かつてそこには確かに緊密な連携が存在していたのであり、現在もそれを受け継ぎ守る努力が途絶えたわけではない。それに、キリスト教を有機的に接続できるとすれば、そこに日本における基礎共同体は成立するかもしれない。

・現在の日本で、キリスト教と地域・社会福祉とを結びつける試みはすでに始まっている。これに教育を結びつけること、ここに日本における解放の神学の可能性が存在するようになる。

・明治以降のキリスト教が日本で具体化した貴重な遺産が、教育と社会福祉の中に見いだされることを、わたしたちは思い起こすべきである。賀川豊彦が、幼児教育と組合運動に力を注いだ意味も、ここから再評価できるはずである。

<文献など>

1. 基軸時代以降の宗教において、人間変革(=救い)が「救済/解放」という構造を有している点については、ヒックの明晰な議論を参照。John Hick, *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989, pp.36-55.
2. Thia Cooper (ed.), *The Reemergence of Liberation Theologies. Models for the Twenty-First Century*, Palgrave, 2013.
3. 映画「みんな学校」(<http://minna-movie.com/school.php>)で描かれた、大阪市立大空小学校の挑戦。